

あした行きのチケット

たなかなつみ

Anima Solaris

あした行きのチケットをもって、南行きの列車に乗る。

二両連結の列車のなかは、人でひしめき合う。わたしは六人がけの座席の端に腰をかける。

目の前の男がわたしの目をのぞき込む。

「あなたの探している「あした」はどこですか」

わたしは答えずに男の目をのぞきかえす。疲れた風情の男は、型くずれしたスーツを着ている。

「来ない「あした」を待つことにはもう疲れました」

男の言葉に、わたしは軽くうなずく。

わたしは膝の上に置いたリュックのふたを開ける。そのなかから巾着を取り出して、あした行きのチケットがそこにあるのを確認する。そしていっしょに入れておいたチョコレートを取り出した。

「すこしいただいてもよろしいですか」

男の手に、わたしはチョコレート粒をざらざらと流し入れた。男の手のなかでチョコレートはあつというまに薬のかたちになる。

「これでやっと眠れる……」

男はそう言って、手のなかの薬を飲み下した。わたしは自分の手のなかに残っているチョコレートを確認する。なんの変哲もない粒チョコレートだ。わたしはぼりぼりとそれをかじった。

列車のなかは薄暗い灯りがともっている。周りが見えない

暗さではないが、本を読んだりするのは無理だ。わたしは目を閉じる。かたたんかたたん車輪の音が耳にうるさい。

隣に座っていた子どもが泣き出して、わたしは目を開けた。向こう側にいる母親とおぼしき女が子どもを抱きしめる。大丈夫よ、大丈夫よ。女の低い声。

大丈夫よ、大丈夫よ。

わたしは子どもの手をとり、子どもの手のなかにチョコレートをあけた。子どもは不思議そうな顔をしてわたしを見つめる。

「「あした」に行けるおまじない」

子どもは不安そうな顔をして、母親の顔を見る。女のとまどった表情。

「あなたの探している「あした」はどこですか」

今度はわたしが女に問う。女がさびしげに笑う。

「「あした」なんてないっていうことは、ちゃんとわかってるんですが」

女の手握りしめられた、あした行きのチケット。

「この子だけでも、「あした」につれていってやりたくて」

女の手が優しく子どもの頭を撫でる。子どもは手のなかのチョコレートをかみ砕き、わたしの顔をちらりと見て、女の腹に顔を伏せた。

わたしの探す「あした」はどこなんだろう。

わたしはその答えを知っているような気もするし、知ら

ないような気もする。わたしはもう一度目を閉じた。
かたたんかたたん。車輪の音が鳴り響く。

少し眠ったのだろうか。ぼんやりとした頭で目を開ける。
涙が流れているのに気づく。夢でも見たのだろうか。

夢。どんな夢？

顔を上げると、スーツの男の隣に、少女がいた。少女は
わたしを見て、にこりと笑った。

なぜか背筋が寒くなった。

わたしは顔をそむけるように急いで目を閉じたが、手に
温もりを感じてあわてて起きた。

少女の小さな手が、わたしの手を包んでいた。

「夢を見たでしょう？」

少女の淡々とした声。

夢。どんな夢？

「あなたがあたしを呼んだのよ」

わたしは少女の手を振り払った。少女は微笑みを浮かべ
たまま、床に届かない足をゆらゆらと揺らす。

「あなたは「どこ」から来たの？」

少女の冷たい問いに、わたしは答えられない。

「あたしが教えてあげる。あなたが来たのはあっち」

少女はその手を後方にかざす。それは列車の進行方向
だった。

「そして、あなたが探しているのは「あした」」
わたしは軽くうなずいた。動かない日々疲れ、わたしは「あした」を目指したのだ。

わたしが探している「あした」はどこにあるのだろう。
少女がにこりと笑う。そしてポケットからチケットを取り出した。

あした行きのチケットだった。

「これはあたしの「あした」行きのチケット。あなたはあたしの行く「あした」には来られない」

少女の言葉に、わたしは軽くうなずく。たしかにそうだ。人びとはそれぞれの「あした」をめざすのだ。それが誰かと交わることはない。

頭痛がして、わたしは目頭を押さえた。そう。そんなことはわかっていたはずだ。

それが誰かと交わることはない。

「でも」

少女の声がする。

「あなたが望むなら、あたしの「あした」を、あなたに譲ってあげてもいいよ」

わたしはふたたび顔を上げた。少女の冷たい微笑み。

かたたんかたん。列車はまだ動いている。

「あなたは、自分の「あした」が「どこ」なのか知っているの？」

震える声で、わたしは問う。少女が笑う。

「覚えていないの？ あなたがあたしを呼んだのよ。あなたがあたしを呼ばなければ、あたしはここには来なかった」

少女はそう言って、床に降り立った。そしてもう一度わたしの手をとる。今度はひんやりとした感触がした。

「思いだして。あなたは「どこ」から来たの？ あなたが探している「あした」は、どこ？」

少女がわたしの手をとって立ち上がる。

「あたしがあなたをつれていってあげる」

かたたんかたたん。かたたんかたたん。

少女の手につれられて、わたしたちは次々と車両を移る。みな一様に辛そうな顔をした人たちが、思い思いの格好で椅子に座っている。

長い。こんなに長い列車だったろうか。いや、乗りこんだときは、二両連結の列車だった。前方の車両にわたしは乗ったはず。チケットにはさみを入れてもらった。それから、それから。

少女の足は止まることがない。どんどんとわたしを次の車両へと誘う。もう前方に向かっているのか、後方に向かっているのかもわからない。

不意にわたしは気づく。少女が、少しずつ成長している。

その髪が長くなり、短くなり、その背丈がのび、肉付きが良くなり、それはまるで、それはまるで。

わたしは少女の手を離した。少女が振り返った。それはまるで。

「あなたは、誰？」

少女が冷たい目つきでわたしを見て、答える。

「いまは、「きのう」のあなた」

少女がわたしの顔でそう答える。わたしは逃げだそうとしたが、少女の手が、いや、いまとなってはそれは少女ではなく、女というにふさわしい存在だったが、その女の手が、わたしの行く手を遮った。

「あなたは、どこへ行くの？」

わたしの言葉に、女は笑った。

「わたしはあたしの「あした」へ。あなたはあなたの「あした」へ」

わたしは首を振った。

「だって、あなたは……」

「わたしは、「きのう」のあなた。わたしは、「あなた」じゃない」

「わたしは……」

「あなたが探している「あした」はどこ？ このさきには、あたしの「あした」が待っている。あなたがもっているチケットでは、ただ、あなたを待っている「あした」に

しかたどりつけない。あなたが探している「あした」はどこ？」

「……あなたは、どこへ行くの……」

「あたしは、あなたの呼ぶところへ。あなたの呼ぶところが、あたしの行くべきところだから」

「……あなたは、ずっと、わたしといたの……？」

「ずっといたし、ずっといる。あたしはどこへも行かない」

わたしはひざまずいた。女の冷たい手が優しくわたしのこめかみを撫でる。

「夢であたしを呼んだでしょう……？」

女のひんやりとした声が、耳から入ってくる。

かたたんかたたん。列車はまだ走り続けている。上方へ？ 下方へ？ もうそんなことすらわからない。

夢屋敷

夢でわたしがいつも探していたのは、ひとりの男だ。わたしから背を向けて、去っていった男。わたしに愛情と裏切りと幸福と悲鳴を教えた男。

夢のなかでいつも男は優しい。わたしはその優しさに、甘えて、甘えて。

餓えたように目を覚まし、涙を流すのだ。もうそんな夜を、幾日過ごしたかわからない。

もうこんな夜なんか要らない。

わたしが欲しがった「あした」。わたしに安寧をもたら

してくれる「あした」。それは優しい男が現実になたしのそばにいてくれる「あした」なのだろうか。それとも男の記憶ごと取り去った、いまとはぜんぜん違う世界の「あした」なのだろうか。

そう。わたしは迷っていた。ずっとずっと。わたしの欲しがる「あした」は、どこ？

わたしはリュックの中着からあした行きのチケットを取り出し、手に握りしめる。わたしが行くべき「あした」。わたしが逃れられない「あした」。

男の夢に溺れて、夜にとらわれてからこっち、わたしがずっとたどりつけないでいる「あした」。

わたしは目の前の女の手をとる。女は優しい顔でわたしを見ていた。

「あなたはわたしの苦しみごと、わたしといっしょにいた……？」

女はうなずいた。

「ずっと、わたしといた。優しい記憶も、辛い記憶も、全部わたしといっしょに抱えて、ずっと、ずっと」

女はうなずいた。女の日から涙がこぼれた。わたしはその涙に口づけた。

「じゃあ、わたしの「あした」をあなたにあげる。そして、あなたの「あした」も、あなたが」

わたしは女から手を離れた。

「わたしはここに留まる。永遠にたどりつけない」「あした」の手前で。日ごと夜ごと、あなたを夢に見る」

女は泣きながら首を振る。わたしは女を抱きしめた。香る汗のおいは、わたしのにおいだ。

「わたしはあなたを夢に見る。あなたは、笑って、泣いて、怒って、あなたの人生を、あなたの「あした」を生きてください。今度はわたしがあなたのそばにいるから。日ごと夜ごと、夢であなたを追い続ける」

「あなた……」

「わたしの苦しみを、過去に駆逐して生きなさい」

突如、列車が大きく揺れた。わたしと彼女は、離れた。

離れて、離れて、離れた。

いくつもの車両がわたしの目の前を通り過ぎていった。

笑っている乗客も、泣いている乗客もいた。女の姿は遠く遠く離れて見えなくなった。

気づくと、わたしはがらんとした車両のなか、ぽつんとひとりで立っていた。

からり、と音がして、車掌がやってきた。

「チケットを拝見します」

わたしは巾着からチケットをとりだした。その小さな紙切れは、往復切符だった。

チケットに判子を押してもらって返してもらったあと、わたしはゆったりと椅子に腰かけて目を閉じた。

著者紹介

たなかなつみ (Tanaka Natsumi)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/n-tanaka.shtml>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/n-tanaka/ticket_index.shtml

著作：夢つかい

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/anthology/ring/tanaka/dindex.html>

ひとりの女が夢を見る

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/n-tanaka/yume_index.shtml

夢屋敷

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/n-tanaka/yashiki_index.shtml

あした行きのチケット

2006年1月8日 第1版第1冊発行

著者 **たなかなつみ** (Natsumi Tanaka)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制作 松谷 和加子 (電脳工房 りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電脳工房 りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。